

農林漁業現地事例情報「農林水産分野におけるIT活用取組事例」

分類	④ 生産・流通等履歴のIT化の取組
取組名	肉用牛の飼育履歴をホームページ上で公開
取組主体	株式会社大野ファーム (北海道・芽室町)

取組の概要

IT導入の必要性、導入に至った経緯	芽室町で肥育牛経営を行っている株式会社大野ファーム（大野泰裕代表取締役）は、以前から食の安全や循環資源型農業を目指しており、生産に関する情報を消費者に開示することは、食品を生産している者の義務だと認識していた。BSE問題の発生を機に、自家で生産している肉用牛を消費者に安心して購入してもらうために、素牛生産農家及び飼料会社と協力し、ホームページ上での飼育履歴の公開を目指すこととした。
IT利用により期待される効果・目標	飼育履歴を全て公開し、消費者に信頼感をもってもらうことで売上の増加を目指す。 飼育過程を全て公開することで、農業経営に対する責任感を向上させる。
IT活用の概要	平成4年9月から同社ホームページ上で固体識別番号による出荷牛の飼育履歴を公開。 飼育履歴（素牛導入時からの治療内容及び給餌データ）は、自社のパソコンから、ホームページ制作会社のサーバーに入力する。 サーバーには素牛生産農家の飼育データも蓄積されており、飼育履歴が付加される。 蓄積されたデータは、インターネットを通じ、ホームページで公開され、消費者は個体識別番号から検索することで、肉牛の生産から出荷までの全ての飼育履歴を閲覧することが出来る。 システムの母体となるデータ管理システムは、ホームページ制作会社のサーバーで管理していたが、20年6月より、J Aめむろ・ペンタックス株式会社・生活者のための食の安全協議会の3社が共同開発したトレーサビリティシステムに変更した。
IT利用者の範囲	消費者

取組の効果

① 効果のあった点	ブランド化による販売収入の増加
	効果の割合 導入直前との比較：50%（増加） 対前年との比較：20%（増加）
② 効果のあった点	取引価格の安定
	効果の割合 導入直前との比較：10%（増加） 対前年との比較：50%（増加）

特記事項

飼育履歴を全て公開しているため、経営者及び従業員が責任感をもって作業に従事し、さらなる生産意識の向上につながっている。

ITに関する課題と今後の展開

導入したシステムに関する課題・問題点	データ管理・入力作業に人員を要するため、人的経費が増大した。
--------------------	--------------------------------

ITに関する今後の取組・展開方向：消費者に飼育履歴を公開することで、安全な畜産物であることの浸透を図り、それに見合った価格であることを認識してもらう。

利用者、(システム)構築業者の感想(声)

(利用者) 飼育過程が確認できて安心して購入できた。
 (JAめむろ) 消費者へのアピールやブランド力強化につながるので、他の農家へも普及を図りたい。

取組主体の概要

設立年次	昭和61年
構成員	8人(従業員)
経営規模	経営耕地面積：畑70ha草地20ha 飼育頭数：和牛交雑肥育牛700頭、乳牛去勢肥育1,300頭 所有施設：畜舎8棟、堆肥盤8基、堆肥舎2棟、飼料庫1棟、粗飼料庫5棟
主な活動内容	大野ファームは肉用牛の生産と併せて、小麦、てんさい、小豆、野菜等の作物の栽培を行っている。安全・安心な農畜産物生産を目指し、牛ふんを堆肥化して畑に還元し、健康な土づくりを実践している。肉用牛の飼料には特にこだわっており、抗生物質不使用・遺伝子組み換えの無い配合飼料、地場産の豆がら等を使用した単味飼料、完全自給の粗飼料を使用しており、生産した肉牛は「未来めむろうし」「十勝芽室産みらい牛」のブランド名で道内量販店などで販売されている。

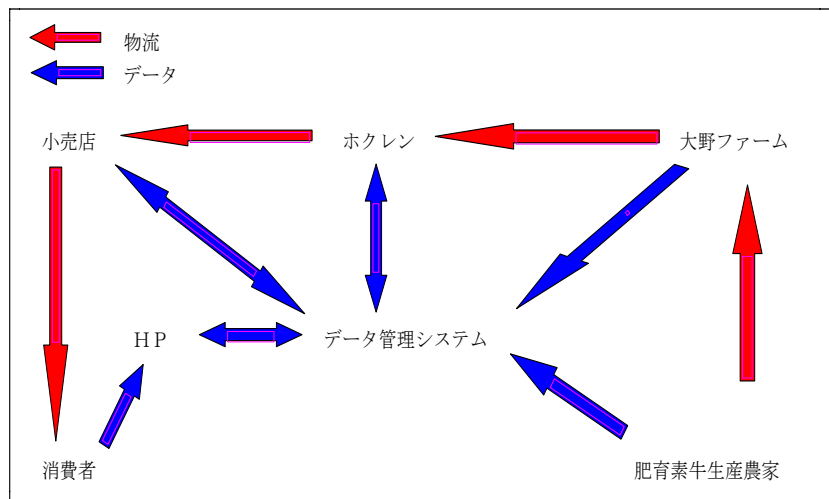


飼育履歴管理システム入力画面
 左側の赤背景部分は肥育素牛生産農家用で、右側の青背景部分が肥育経営(大野ファームで入力)用



飼育履歴を公開しているHP
 HP上より個体識別番号により飼育履歴を検索できる。

イメージ図



情報収集官署名：北海道農政事務所 帯広統計・情報センター

連絡先：0155-24-3353